「銭形平次親分というのはお前様かね」

年輩 0 駄馬 に布子を着 せたよう な百姓男が、 平 次 0 家 0 門 

べで結 K 面 六をあま な で 老<sup>ょ</sup> け ります。 すが、 ッ って、 ソ て y り越して (J 微笑 る と立ちまし 月さかやき の す は そ る は 4 伸 な ح の 眼 渋ぶ た び (J 放 か 紙が 尻 題、 もわ に 色に 皺 従 が 焦ゃ か 寄 つ りませ け って、 て熊の子 た 皮 ٨ 膚 飛んだ可 0 油気 のような せ 11 0 で 愛ら な 凄ま 実 11 髪を は じ 61 藁り 11 髯 Ŧi.

銭 Ŧ. 形 郎 の親分は は そう言 奥に つ て、 11 るよ グイ と長んが 俺は子分の e s 顎を引 八五 郎と ( ) て見せました。 e st うも のさし

「道理で――」

百姓男は感に堪えた顔をするのです。

「御挨拶だね、何か用事があるのかい」

江 戸 開 府以来とい わ れ た 捕 物 0 名 人に しちゃ、 少し変だと思 e s

ましたよ。悪く思わないで下さいよ」

う خ が 々 て 11 ね 11 で 腹 も立 て 5 れ ね え

相手が正 直過ぎて、 八五 郎 0 ガラ ツ八 も大 たじた じで

何 を ているん だ。 お客なら早く取次ぐが 宜 11

畳。 首を伸い のば は 奥 せば、 か 5 声を 格 子 掛 けま の外に立っ す。 奥と言 た客 の睫毛 つ ても入 b 読  $\Box$ めそう 0)  $\equiv$ 畳 0 隣 六

んなや り 取 りが あ つ て、 客 の百姓男はようや

中

^

通されま

その 大地 畳 上 の の子ら 上 お ^ 真 いた手が、八つ手 しい人柄を思わせます。 四 角 に 坐ると、 座布 の葉のようにでっ 团 か 5 膝が二三寸は か ( ) のも、 み 出して、

形 0 親 分さんでございますか。 私は柏木 0 在 の 者 で、 百兵衛

と申しますが

百 姓男は慇懃に挨拶しましたが、 八 五 郎 に気を兼 ね た b 0 か

容 易 用事を切出 しません。

11 った いどん は 八五郎と言って俺同様 な 用事で柏木からはるばる来なす の 男だ。 遠慮なく話すが つ たんだ」 宜 11

次はもどか しそうに誘 (1) 0) 水を向けます。

「それじゃ申しますが、 実は 親分さんにお願 4 が あ つ て 参りま

たし

外じゃございませんが、 親 分の智恵でこれを つ判 じ て 頂きた

いんで」

から大事そうに て、 百兵衛 平次の方 は そう言 畳 K 押 って、 ん だ紙片を抜 しやる 内 ので 懷 ろ した。 取 か 9 5 う 登ん そ の皺り 本はいる を丁 0 財 寧に 布 を 膝 出 す 0 中

紙片は半 紙 を 四 つ に 切 つ て、 それに禿筆 で 書 11 た

ほうきか らた 9 み

かま の は な か ら ひ つ じさ

わ 0 み み か 5 11 ぬ

ち 0 な か 0

斯<sup>z</sup> う 読 めます。

フーム」

平次もさすがに唸るばかり。

親分さん、 これを何と解いたものでございましょ

、 帯から 辰巳、 <sub>たっみ</sub> 鎌の鼻から未申、 鍬の耳から戌亥 中 眼

と読むんだろうな。 どうだ分ったか、

平次の智恵もこの謎には持て余しました。

自慢じゃねえが、 薩張りわからねえ。 どうかしたら、 箒だの

鎌だ 鍬だの って、 お百姓の道具調べじゃありませんか」

鎌 の鼻や鍬の耳なんか百物語へ出て来そうだぜ」

鍋 の耳に、 五徳の足なら分ってるが

ちとらの智恵じゃ解けそうもないぜ。寺小屋の師匠か 鹿だなア。 お聴きの通りだ百兵衛さん。 この判じ物

持って行っちゃ何うだ」



平次はとうとう投げてしまいました。

左門 そ 町  $\boldsymbol{b}$ 0 白 Þ 井白竜先生 つ て見 ま し た。 にも 村 見て貰 の 手習師匠 (J ま したが、 にも、 菩ぽ提に まる 寺じ っきり見当が 0 和 尚に

つ きま せ ん 0 ح 0 上 は 江 戸一 番 ع 4 う

そ れ は 止 て れ ح 0 平 次は 唯 0 岡 つ 引 きだ。 学 者 ロや易者. に

分ら な ( ) ح とが 分 る わ けは ねえ。 ところで、 の 謎々を解 けば

一体どんなことになるんだ」

そ そ れ 11 じゃ、 つ は 申 親 上 分さん、 げ て b 仕 一様がご これでお暇 ざ 11 ま た せ します。 ん 0 ほ ん 大きに 0 内ない 証し おや か ま

ゆ

う

御

座

11

ま

た

恰<sup>かっこ</sup>う か 百 つ た 兵 で 様 飛 衛 出 子 は で、 謎 々 て しま 挨拶 0 理 由 11 P ました。 を そこそこ 訊 か れ る ٤, 逃げるように外 ょ つ ぽ どそ れ ^ が 言 11 器 用 な な

ありゃ何ですえ、親分」

わからないよ」

親 分 0 智 恵を試 に ` 何ど 処こ か 0 人 0 悪 11 奴 が、 わ ざとあ ん な 風

をして来たんじゃありませんか」

**H**. 郎 は そ ん な事まで気を 廻 す 0 で た

馬 鹿 な ح とを言え、 あ れ は 真面 目 な お 百 姓だよ。 あ 0 柄が は拵え

ものじゃない」

気

が 付 0 不 か な 思 議 か な つ 訪 た 問 0 者 で す。 が、 Þ が 7 恐る べき事 件 0 予 告 ع は 平 次も

4

取 0 家 れ 銭 柏 形 ば 0 寅吉と か 親 ね て来た り 分 の、 いう、 遠 ある のは、 方 で 日 顔 気 0 そ 0 0 昼近 売 毒 れ れ か だ ら 二 た 11 が 時 中 年者 分で + 柏 H 木 した。 0 余 まで行 御用聞 り 0 後 って が、 く 神 正 れ 月 田 ま 0 0 e s 平次 松が か

柏 木 0 親 分 0 頼 いみなら、 何 処までも出 掛けるが、 11 つ た 11 どん

な用事なんで――」

少 は つ 案外手 て W た 矢先 軽 に でも 乗 ŋ あ 出 つ す た 0 0 で で す。 よう。 ろ く な 御 用 始 め b

刀まで許され 十二 二 社<sup>き</sup> 0 近所 た家ない に、 柄がら 楢ら で、 井い 主 山 左 0 衛 山 門 左 ح 衛 41 う大名 門 は三月 主 ば が か あ る ŋ 前 が、 に 苗ょ 字じ 帯な

リ亡くなった――」

座不 ば ょ は 用 わ 急死で、 容易 金 卒中だという な か を 自 5 騒ぎだ  $\mathcal{H}$ な で 由をする 千 な 11 11 代々楢: 0 両 4 尤もも ほ か 61 ら、 どお わ か か 井家 5, に け 地 預 暮 柏 で 所 に は そ か 木 ŋ  $\Phi$ 積 5 な 家 れ 番 て 4 屋 ん に あ 不 0 が 敷 で 0 あ 春 長 る  $\boldsymbol{b}$ 思 者 議 貸 0 木 る ^ 筈 か で で 金 は ったことに 4 け bな 0 春早々 て う 何 *( )* 千両と が、 楢 差 ん とあ 井 迫 そ 甲府送 家 遺い つ  $\epsilon J$ 言え れ て は る を返さ 毎 Ŧī. う を か ら、 する 千 金 り 煤す 両 の 0 な 行 間 公 別 0 儀 方 け P に れ 御 当 が な 面

**「フーム、それから」** 

楢 井 は 家 だ に 11 ž 伝 面 わ 白そう る金と、 で、 公儀 平 か 次 5 b膝 御預 を乗 り 0 ŋ 金、 出 しま 併ゎ せ た て 万 両 近 11

捜 0 \$ 真 0 が 抜 つ 最 11 どこ 中 て もどう ゆうべ か に 隠 若 し て 旦 bてある 見 那 0 付 に 福 か 相違な 松が 5 な 死ん 11 11 だ ع の 11 うが、 だし ところ 三月 で、 0 あ 0 騷 i s だ

?

を れ 0 掘 人 な 屋 が 敷 ŋ 11 崩 見 0 裏 付けた。 て、 で、 先 崩ず 代 鍬さ れ な 0 た 親 6 石 旦 か 垣 那 を 摿 が 打 隠 て た て れ た あ 7 金 死 つ でも た ん ところを で 捜 11 る て 0 見る を、 ( ) た لح の 今 朝 か 石 往 知 垣 来

立たな 大 0 金、 です 寅吉 は前 か 柏 つ 木 大 た 公儀 後 で 紛ん 0 0 で 失ら が 事 す 甲 情 府 を て 勤 詳ゎ 番 ま つ 0 諸 説 た 士を賄うたっ で 明 して、 て、 は、 土 平 地 め 次 0 御 に 0 用 智 用 聞 意 恵 を 0 た五 寅 借 吉 り 千 に 0 両 顔 来 が た 0

ところで 柏 木 0 親 分、 少 し 訊 き た 11 ح ع が あ る が

話 を 聴きお わ 9 た 平 次は 改 め て 訊 ね ま

「何だえ、銭形の」

柏 木 に、 百兵衛 ع 11 う 男 が 11 な 11 だ ろう か ` 三十 Ŧ. 六 0 大き 11

百姓風の――」

0) 子 そ れ 0 ように は 楢 井家 可 愛が の 作 男だ つ た 男だ。 よ。 亡な < 国で な 者 つ た で 先 少 代 扱 0 山 11 悪 左 衛 61 が 門 が、 自 分

「よしッ、行こう」

平 次は百 [兵衛 が 楢gg 井い 家 0 作 男 ع 聞 ٤, 急 に 乗出 ま す

行 つ て れ る か 有 難 11 そ れ じ Þ 明日 で

そ 福 松 ع か 11 う 若 主 人 0 死 骸を 見 て おきた 11 0 れ か

らすぐ出かけよう」

平 次は す ぐ 支度をすると、 居 合 わ せ たガ ラ ッ 八と三人、 神 田

か

5 柏 木 ま で、 近 からぬ 道を急 11 だ の で す。

柏 木 に着 11 た 0 は 幸 11 にま だ H 暮 れ前

有 難 11 陽 0 あるうちに 見ておきた e s  $\boldsymbol{b}$ 0 が 沢 山 あ つ 家 0

中 入 る前 に、 ざ っと外を 調 べて置 こう」

暮 神が 0 れ 足 0 平 小 で 行 さ す は ぐ 楢 < 11 庭 井家 陽 森 から井戸端 0 <u>^</u>, 光 の を惜っ 門 肥り 料う を 入ると、 しむように、 溜だめ <u>`</u> から空井戸 畑へ、 家 0 中 塀から石垣へ、 大急ぎで見 ^ ` 0 騷 物置 ぎに から裏の流 は 廻りました。 眼 そ bの 外と れ れ の産業する ず ^ ٤, そ

若 旦 那 が 死 ん で e s た のはこの 辺だよ

寅吉 は 低 11 石 垣 0 下 に立ち止 りました。

じゃ か 5 石 な 間 を 4 0 背 転 か ょ が 石垣 ŋ て落 低 0 11 下 さなきゃ 石 へ腹 垣 が ん 崩 這 れ て、 ( ) に で そ もな の下敷 つ て に 居るところ な つ て 死 ぬ ^ 0 は 上

若 旦 那 福 松 0 死 骸 を 見る前 に 平 次 は 早 < b そ 0 死 に 対

脈の疑いを挾んだのです。

「だが、この通りの血だぜ」

そいつは後からでも付けられるよ」

平 次にそう言 わ れ ると、 寅吉 はそ 0 明智 に 承 服 しな 11 わ け に は

行きません。

Þ ? 石 垣 0 石 が つ 足た ŋ な 11 が

平 次は 石 垣 0 崩 れ ح そ 0) 下 転 が 9 た石とを目 分量 で 勘 定し

ておりました。

「最初っから石が不足じゃないのかな

崩 れ た 跡と が 9 で、 下 に 落 ち て e s る 石は二 一つだ」

神「一つは

上

に

あ

るだろう」

子だ」 る が もな 霜柱をこんなに おや、 変なことが 11 土を あるぞ。 掘 つ 畑 て を 何 処 ひ どく か 荒し 運 だ て

フー ム

行 つ て見よう。 そ の 井 戸 0 中 が 怪 11 0 井ぃゖ 桁ĸ 0 下 まで 泥 だ

らけだ

そ e s つ は 空井戸だ。 中 に は 水 は な e st 筈だ」

も投 血 り込ん が は 付 な 11 であるようだ。 が て いると大変なことになるが 井戸 。 の 中に あの土に霜柱 真新 5 の 砕<sup>々</sup>だ がう け 6 たのが交っ ع あ うるぜ。 て、 石 石

に

置 飛 んで行 0 そう言う顔 って、 三間梯子を軽々 色を読むと、 ガラ と引 ッ 八 つ 担かっ は つ 11 で 11 来ま 目 ع 鼻 0 先

まだ中が 見えるだろう、 入 って見まし ょ う か 親 分

て れ

ガラ ッ八は平次の答えも待たず、 空井戸 の 中 に梯子をおろすと、

応落着き工合を調 べるまもなくスル ス ル と降 り て行きました。

どうだ、 八。 土 は ?

新 e s 畑 0) 土だ。 霜柱 が ザ ク ザク 交っ てますぜ 戸 の 中

霜柱 な 6 か 話 の種だ」

か

ら石

は

あ つ 血

戸 で ら石を投げ込まれ <u>F</u>. 郎 で 突き落され の声は 井戸 若 旦 て惨殺され、 那 0 上まで、 0 福 ある 松は、 e s 無気味にひ は自分から入ったところを 死骸は曲者の手で引上げられ ゆ うべ 夜 中に びきます。 起出 て それ て、

戸

替

0

時

に

で

b

使

つ

たら

に

7

掛

け

少し 離 れ た石 垣 \_ の 下 で怪我死をしたように偽装されたのでした。

す。 見れば では 血 後 朽巜 0 ^ ち 跡 畑 \$ か 0 けた井桁 見え 土を投げ な いように に、 込んだ 微す か のは、 細工したのでしょう。 なが ら泥足の 空井戸 0 がが付 中を覗 そう e s e s たく て 思 お りま って

「恐ろしい 足跡 じゃ な 11 か

寅吉そ の 寸法を 測はか つ て お ります。 仁王様 の 草 鞋 よう な 跡 が、

夕 陽を受け てどうや 5 斯うやらな 読 め る ので

もういちど引返して見よう」

 $\equiv$ は黙 りこく つ て 畑 0 中を石 垣 0) 下まで引返 しま た。 陽 は

す つ 傾たむ 11 た せ 11 か 霜 柱を 砕 11 た 足 跡 が ` 先 刻 ょ ŋ は 濃

Ш

みの 陰影を作 って、 は つき り見える 0 です

大き 足 跡 ع 小さ ( ) 足跡 とあ るよう だ。 小 さ 11 0 が 殺さ れ た 若

旦 那 で 大き 11 0 が 下 手 0 だ ろう」

こんなでっ か 11 足跡 が 滅 多 に あるわ け は ねえ。 十 二 文半 甲 高 ع

いう足を捜すん だ ね

そう言 う 寅 吉 は 胸 0 中 に 百 兵衛 0 大き 11 身体 ۲, そ 0 抜ばっ 0

手足を考えて W る ので た

そ こから納! 屋ゃ ^ 行 つ て 見る ٤ 軒き 0 下 に仁王 様 0 草 鞋 0 うな

0 が + 足 ば か ŋ ブ ラ 下 げ て あ ŋ そ 0 う ち三足 は 明 か 新

11 足 形 が 付 *( )* 7 お ŋ ます

百 衛 0 だ

P 寅 吉 ら は 真 *( y* つ 先に 湿め 立 り 0 つ 泥 て 納 の付 屋 い手頃の麻縄が二三本輪 0 いた鍬が一丁 中 入っ て `` 見 ま それに頭 た 0 中 上 に は は 井 れ

7 あ 取 りますが、 つ た跡 が は その つ き ŋ 本には、 付 11 て 明か る で に は 血 あ 潮 り ま らし せ 11 b か を、 泥で拭

Ξ

らも、 て おります。 家 の お葬ら 中へ入ると、 ( ) の支度やら、 **楢井家は打つづく不幸に** 弔問の の客などで、 す 何となく つ か り 滅め ザ 人h ワ ザ ŋ なが ワ

寅吉の姿を見て いちば ん 先に駆けて 来たの は、 甥ぉ の 千 次 郎 ح

う二十七八の男でした。

「千次郎さん、 親分、 御苦労様 銭形 で 0 親 分が 来てく れたよ。 こちらは Ŧi. 立郎見が 哥に

だし

「それは、どうも」

千次郎は 少しばか り 腑ふ に落ちな い顔をしてお ります。

「若旦那 0 死にようが 変 つ て ( ) る そ れ に 万両と e st う 大金 b

捜さなきゃならない」

**゙**へえ―\_\_

ズケズケ言う寅吉 0 顔を、 千次郎は不足らしく 見て ( ) る 0 です。

ところで、 百兵衛 は 見えな いよう ·だが 」

一葬が e s の支度で、 新宿まで小買物やら使い やらに行きましたよ」

あ の 男は亡く なった大旦那に可愛がられたというが」

平次は横から口を出しました。

きでし どう よう」 う b 0 か、 あ の変人へ目をか けま いしたよ。 大旦 那 0 物好

「若旦那は?」

りま 遊 ましたよ ょ び せ りほ ん。 は 道 百 か 百 楽 に道 兵衛 強 兵 衛 楽 とは 11 若 は 0 主 旦 な 性 那 人 41 0 に 百 0 仕 向 兵 わ 打 衛 な つ て が か 11 遠慮 気に ら見る 方 で 入 0 ٤ らな な た。 11 揚弓、 ことをズ か 何 つ た ろ 雑ざっ 0 作は 国で ケ bズ 無 者 か 理は ら茶屋 ケ言 稼せ あ

千 次郎 0 調 子 に は、 百 兵 衛 を物 0 数 とも 思 わ な 11 日う 吻ん 0

妙 反 感 5 11 P 0 が 響 < 0 で した。

に 兀 交 そ そう 五六 つ んな話 て、 0 で 田<sup>た</sup>んぼ す を が 理り の て 屈ない 身 仕 体 事 こねそうな るところ は二 く 5 人 11 とも は ^ 男で、 番頭 出来そうです。 立派 の喜之助 で、 千次郎よりは 忙 が 61 顔を出 時 は、 段と扱 作男 た。

「おや、親分さん方」

両 取ら 0 混さ 金を今 み 0 日 とこ 明 ろを気 日 中 に 見 0 付 毒 け だ て が Þ ろう 銭 形 と言う 0 親 分 んだ」 が どう 万

と寅吉。

そ は 有 難 11 で 0 そう て 下さる 楢 井 0 家 名 が

かずに済みます」

ところで、 若旦 那 0 死 骸 を 見 せ て 貰 11 た 11 が

「へえ、どうぞ」

屏びょ ح 上 あ 見てと げ 風が 喜 0 之助 0 中 さ 膝ぃ りまし か に 行ざ に ら、 案内され ŋ 寄 北 た。 枕 十貫 つ で若旦 た 目 て、 平 まことに b次 ある  $\equiv$ 那 は 人 0 石を 死 は 二た目と た 骸 つ 奥 吅 た が 0 Ė 横 たえ 付 は見ら 目 間 けら で、 に 通 7 れ れ 井 あ ŋ た 戸 ŋ ま な 死骸 ます 0 11 た。 中 惨んたん が で 相 型 た 違 線 0 る な 間 香 如 死 を き 4 以

に ようです。

親 分 さん 御覧 0 通 り でござ e s ます。 弟 0 敵 を 取 つ て 下 さ 11

お願 11

品 三十 0 そ 前 ある女でし つ 後 と 平次の の 年 増 た。 女。 横 で **電さ** あ ま e s り て 綺 麗 ワ ではあ ナ  $\dot{\mathcal{D}}$ ナと顫える手を合 りませんが、 鄙な びた中 る は、

姉 さ ん 0 お 稲 さん だよ」

り。 しま 縁 る は 楢 に 0 寅 は 福松 な 吉 井家にたっ つ たよ り、 は に娶合 お由と 人、 後ろ う 楢 井家 で お す。 [せる た一人残る 稲 4 か ら言葉を添えます。 つ 0) ^ 後 帰 ع て 先代 ろ 11 つ う に た 引 娘。 0 のだ 噂 配れ 添  $\boldsymbol{b}$ 偶が あ うように、 度縁付 りま の遠 ٤, したが、 い姪で、 惨死 これは後で聴きま ( ) 美し たが、夫に た福 + そ W 顔を俯 九に 松 のままに 0 な 死 姉 向む なれて離 で、 つ した。 た 流 け ば れ て 今 か 7 61 で

福 に 入 松 福 らな 松 5 は道楽者で通人ではあ 見 か ると野 つ たらしく、 暮 った お e s 泥 由 臭 ったが、 はまたお人形のよう e s 娘 に 恐ろしく 過ぎな か 醜ぉ つ 男と に綺 た で、 0 麗 で お由 ですが の気

皆 平次は んな いきな 0) 寝部屋を見せて貰 いたい ( ) 出 が

り変なことを言

します

へえ どう ź

案外気軽に案内してく れ た 0 は、 甥ぃ の千 次郎 でした

勝 が 0 手 寝部屋がまた、 に 分お城のような大きな家で、 外 は銘がいめい ^ 出られるように のを存分に、 百姓家 の呑気さでろくな締 な って居りますから、 部屋ず 寝部屋なども下女二人 つ 取ってあ りもなく、 り 夜中 ´ます に 外 そ そ は れ 別 ^ 0 出 ぞれ 銘 です ょ 々

点 て うと思えば、 で いる者 は二 は 人 人 0 誰 下 もあ 女 でも人に 0 外 り ま に 知られず せ は ん 家 中 に 0 勝手 者 で に 出 現ヶ場。 5 不り る 在バ 証 わ け 明 を ح 0 つ

中 あ、 か 最 5, 初 これ に 見た ポ は 口 ポ 0 は 口 番 と 生湿は 頭 0 喜之助 ŋ 0 土 が 0 部 ح 屋。 ぼ れ 落 押 ち 入 る か ら で は 布 あ 寸 を り ま 引 せ す か。

寅吉 は気色ばみまし た が 平 次は 素 知 ら ぬ 顔 で そ 0 塊れ を

?

め 次 は 鼻 千 紙 次 に 郎 包みます。 0 部 屋。 こも 押 入 の 布 寸 0 中 は • か な り 0 泥

畑 肥 料 0 交 つ た 生 湿 ŋ 0 黒土 は 少 5 11 揉も ん だ ところで、 で、

容 落 ち ま せ ん。

百兵衛 泥 が お 稲 とお 0 9 乾 て お 由 堅 ŋ 0 ます。 め 布 た 寸 ょ に う は はさすが な は煎餅布団! など は 付 は 61 て ザ ( ) ませ ク ザ ク ん する が ほ 作 男 ど 0

案 内 銭 形 0 千 平 次郎 次 は は 泥 杲 0 紙 れ 返 包みを三 つ て 物も言 つ 拵さ ( ) え ませ て、 ん。 ひどく 面白そうでし

四

次は そ 兵 れ 衛 を が 縛ろうとする 帰 つ て 来た 0 寅吉を は す 無 つ 理 か 一に物蔭 り暗 な に 連 つ れ て て行 か 5 で つ て た 平

て 柏 木 0 親 ち 分。 な 11 百兵衛 ば を か 縛りた り だ。 し ( ) ば 0 は尤っと 5 く もだ 待 つ が て 証 拠 が 揃 11 すぎ

だ が 銭 形 0 親 分。 万 一逃げら れ ちゃ

11 p そ れ は 大丈夫だ。 若旦那殺 0 下 手 人を挙 げ る

大事だが、 俺は 今晚 中に 万両 の 金を捜し出して見せるよ」

か 11 そ れ は ?

平次 の大言に おどろ いて 張 り 切 つ た 寅吉も ば ら は百兵衛

を見送る気に な りま した。

「また逢 った ね 百兵 衛

あ ッ 銭 形 0 親 分さん

11 きな り 灯 0 中 ^ 顔 を持 つ て行 9 た 平 次。 そ れを見た百兵衛 0

面がん 喰ら いようは あ りませ ん で た。

た いそう驚 く じ Þ な 11 か

親 分がここ に 居なさるとは 思 11 ませ ん

ح ろで、 61 ろ 11 ろ訊きた 11 ことが ある。 提灯を点け 納 屋

来て くれ」

へえ

百兵衛 は ح の 平 次 0 変 つ た 望 一みに従うに ほ か は あ り ま せ

そ 平 次は ガラ ッ 八 0 八 Ŧī. 郎を呼 ん で、

菩は間 提ぶに平 0 和 尚と、 村 0 手 習 11 師匠 ٤, 左 門 町 0 ららな 11 者白 井

白竜に を聴きに行 逢 つ て、 った 百兵衛  $\boldsymbol{b}$ 0 は な 0 ほ 11 か か に 訊 あ 0 11 て 不 思 議 れ。 な 謎 帰 々 ŋ 文 は 寅吉 旬 親 判 分 方

家 で落合うこと に よう

ゃ 親 分

 $\mathcal{H}$ 郎 は宵闇 の中 を飛ん で行きま た。

百兵衛に提灯を持た せ て 納 屋 0 中 ^ 入 9 た 平次は

草鞋はは 皆 6 な お 前 が 履は 11 た の か

よく 数を勘定してく れ

お そう言えば一 足汚れ た の が多くな ってますよ。 二足だけ

か 履 か な か つ たが

百兵衛 は 腑 に落ちな い顔をし て お ります。

ころ で あ 0 謎 々 0 文句 だ が あ れ は何処から出し たんだ。

今と つ て は言 つ た 方 が 宜 か ろう。 若 旦 那 0 福 松は の文句

のた め に 殺され て いるん だ

ぇ ッ 本当で す か、 それは 親 分

俺 は 嘘 は言わ な 11 そ 0 疑 11 が お 前 にも 懸かか つ て 11 る ぞ。 見 る が

宜 e s 寅吉親 分 は ( ) つ 縛 ったも 0 か と考え て *( )* る じ Þ な į, か

言 いますよ、 親 分。 それ は半歳ほど前 に亡く な つ た 大 旦

那

預 つ た P の で

そ 0) とき大 三那 は 何と言 った

福 松 は 放埓の だ か ら、 う つ か り大金 0 隠 し場所 を教え る わ け に 行

か な 俺 取 る歳だ。 0 頃 0 様 に 身 体 が 弱 何 時

b

ح

つ

ち

Þ

な事 があ る か もわ からな い。そこで 生 懸命工夫を凝 5 てこ

お 謎々 俺 を拵えたよ。 0) 身体にも 万 b の 0 事が 用 意 に福松 あ つ たら、 に 枚、 そ 0 謎 お 前 々を解 に 枚 11 預 け 万 て

両 て 0 金を出 れ。 見る人が見れば必ず分る筈だ Ļ 半分は 御役所に返し、 半 分は楢井 とこう仰有 の身上 11 た めに

す る と 福松もそれと同じ謎々を書 (1) た 紙片を 枚持

0 だな」

そ れ に 相 違ご ざ e st ません

P 廻 ŋ 0 品 b見た が そ 6 なも 0 は な か 9 たぞ」

寅吉 は П を容 れ ま た

誰 か 盗 つ た ん で ょうよ」

旦那と一番懇意 にして *( )* た の は 誰だ」

平次は言葉を改めます。

俳ぱい 浪 が 上手 0) 北 で 田 若 浅五郎様、 旦 那 と 無二 や、 0 つい 仲 と、 う、 で 0 先 た よ。 生で 今 す 晩も が、 お や、 通 つい と、う、 夜 に 見えて り 雑<sup>ざっ</sup>

いますが――」

「家の者では」

番頭さん でし よう か、 千 次郎 さん で

これは百兵衛も見当がつきません。

ところで、 それ 先代 はもう。 の 山左衛門旦那は百姓仕事 ح の 大身代 0 大旦那様 ですが、 が 好きだっ 三日も鍬を た の

良ら 持たずに へ出ま したよ。 *( )* ると、 よく 気分が 出 来 悪 た方 11 と で 仰 有 って、 よく私と e s つ

百兵衛 は 自 分の 仕 事 に 理 解 0 あ つ た先代 0 主 人 を 偲  $\lambda$ つ

湿っぽくなるのでした。

ーそ 大旦 那 が 使 つた鎌い ع 鍬 が ある筈だ。 見せて 貰 おう か

「これで御座いますよ。親分さん」

鎌 を 百 兵 衛 して は 持 11 そ つ て 11 そ 来てくれました。 と納 屋 の 壁 0 上 に どっ 打 ち ちもよく洗っ つ け た横 木 か て 5, いて、

刃先はピカピカ光っております。

を貸 て れ。 ど れどれ、 鎌 0 柄ぇ は 尺 Ŧ. 寸 か 鍬 0 柄 は

二尺八寸、それでよし」

平 次は 納 屋 に 備な 付える け た 粗 末な 物 尺 で 鎌 ح 鍬 0 柄 0 長さを 計 ŋ

ながらつづけました。

もう あ、 又 ーつ か 訊 < 使 が つ たら洗 そ 0 泥 つ だら 7 置 け け な 洗 鍬はど わ なきゃ うし 錆さ た W び る だ か 5 つ て

あ

61

れほど言って置くのに」

0 百兵衛 持出 は してゴ プ IJ プ シ IJ ゴ シや ながら、 っております。 泥 だらけ な 鍬 を取 おろ 納 屋

## 五

母<sup>ぉ</sup> 屋ゃ 引返すと、 お通夜 の 人が 大分集 って、 中 に は 福 松と

0 間 だ った と いう、 浪 北 田 浅 Ŧi. 郎 なども交っ て お ります。

平次は家中の者のいる中でいきなり、

百兵衛、 | 土電 0 前 - **箒から** 辰巳-荒神柱 0 側 に お لح いてある荒神箒を指す いう謎々 の 文句 の箒 は ح 0 で れ だよ」

そこ 多勢の は真 眼 つ す は、 ぐ 平次 に 門 の 指先 で、 闍 0 0) 荒神箒から辰巳の 中 にはひろびろと畑が 方角へ 展べられて 動きます。

鎌 鎌 P 鍬 の 鼻 で寸法を か、 取 面 って歩く 白 i s な。 ところで寅吉親分、 のも厄介だ。 今 晚 は こう暗 親 分 0 < ところへ厄 な つちゃ、

いるだけ

介に な って、 明日の朝うんと早く来て見 るとしようか」

宜 ίĮ と も。 ح こころで、 万 両 は大丈夫か」

寅 吉 は 人 0 聴 < 耳をはば か つ て、 平 次 の傍 に 摺す ŋ 寄 り

大丈夫とも、 もう手に入 つ たも同様だよ」

ح んな大きな事を言 e s な が 5 平 次 と寅吉は つ 11 淀にはし 0 近所 0

寅吉の家へ引揚げました。

「親分、分りましたよ」

そこに待っていたのはガラッ八です。

「お寺か、占者か」

占 *( )* の白 井 白竜 の ところ <u>^</u> 今朝あ の 謎<sup>な</sup>ぞ を持 つ て行 つ た 者が あ

りますよ」

「女だろう」

「えらいッ、さすがは親分だ

「おだてちゃいけない」

お 高<sup>z</sup> 祖頭巾を深 .. く 冠ゕ゙ った 若 い女で、 中 へ通らずに、 ( ) きなり見

判を光らせて、 あ 0 謎を 見せたと言うんで

「白竜は何と解いた」

「分らなかったそうですよ」

「箒の辰巳で、 鎌ヵ の未申し しな ん てえ のは 三世相 に P な e s よ。

ろで一寝入りして出かけようか」

平次は寅吉の家へ泊り込みました が 真 夜中頃にな ると、 11 き

なり飛起きて支度を始めるのです。

「どこへ行くんだ、銭形の」

「ちょうど夜半のお経が済んだ頃だ。 曲者が今ごろ動き出 11

るぜ」

十分に支度をして出て行く平次の後 か ら寅吉と八五 郎 b 跟っ 11

て行く外はありません。

11 間 にこの辺 の案内を見 て お ( ) た か 平 次 は 大 て 迷う

子もなく、 真っ暗 な 畑 0 中 へぐんぐん入って行きまし た。

「しっ、静かに」

畑 0 中 に 蠢さ め 者 平 次 は そ れ を 見 る 半 分

振 りで三人を三方に分け、 網を次第に絞っ て行きます。

のと、

神 物の影がそれに気が付く

用 **ッ** ∟

郎 が 飛付 く の ح 緒でし た。

灯 ŋ の中 へ引立てて 行くと、 それは 甥の千次郎 の忿 怒と悔い ع

に歪む顔だ った の です。

どろき騒ぐ家人 0 中 か ら、 お どお どす る お 由 を見 付 け そ

れも寅吉に縛らせ、

「まだ真 つ暗だ。 \_\_ と休みして か 5 金 は 捜すとしよう

は落着き払 って、 夜 の 明 け る のを 待ちます。

金はどこに隠してあるんだ。 銭形 0

寅吉はたまり兼ねて訊きました。

「もう種を明か しても宜 いだろ、 謎 の文句を俺はこう解 (J たん

二尺五寸の鎌 一箒は荒神箒、 柄の寸法で五十六だけ、 それに変りはない。 そこから辰巳(東南)の方

0

の鼻という のは 鎌 の八は、 七と八を掛けて七八の五 十六だ。 千次

郎はそれを八十七と思 い込んだから、 飛んでもない方へ行ってし

ま った」

百 四十尺 -二十三間と二尺行くと向うの生垣に突当る勘定だ。

そこ 寸だけ未申 から鍬 の柄三尺八寸の寸法で三三が九つ、 (南西)の方へ行くと、 そこに大きな捨石が一 つまり二十四尺二

に 何 か 仕掛けのあることだろう」 その戌亥(西北)が空井戸だ。

П

の中の

眼というのは、

井戸の中

謎 解きはまことに 見事 で た。 夜 が 明 け る 直 そ

を調 通 辿だ べると、 って見ると、 中程 のところに二 果して昨日の空井戸に突き当 つ、 はめ 込みの石があって、 ŋ̈́ 空井戸 , の それ

鎌

つまり百四十尺行く

を 抜 ٤ 大きな横穴 が П を 開 く 0 で た。 穴 0 中 に 万 両 の

金

が 隠 てあ つ たこ ح は言 う ま で  $\boldsymbol{b}$ あ ŋ ま せ ٨

X

 $\times$ 

件 が す つ か り落 着 て か ら 平 次は ガ ラ ッ 八 0 た め に 斯ニ う 説

明 れ ま た。

世 た 郎 竜 E 死 ع 13 な 骸 行 か 万 千 0 0 方 次 を 悪 ع か 出で 両 11 つ 智 気 ح ら 郎 七 0 0 て 奪と さ 捜 倍 恵 ろ 目め 金 ょ が ح Ę を言 鎌貴 う 付 が お ع ^ つ ع だ て 鍬 Þ た 隠 由 11 思 が 鍬さ 謎 が は福 11 0 て つ つ う た は た 柄 0 て て ど 百 ん あ あ W 柄ぇ さてこ 福 松 が 0 三 う だ。 ど 兵 ると 松を を の で だろう。 う 百 + 寸 衛 騙ま と喜え れを 兵 法 殺 だ ち 八 て b を 衛 ろ ょ 倍 P 知 て らず、 う 自分 う ح と とる話をす 解 解きようは た 空 どそ 井戸 見当を けな 助 e st の さ。 う 0 0 こを 男 寝 寝 ح に か は 床 床 謎 0 つ つ つ 捕えた ると、 良 た。 け に に な 々 中 れ て、 ま ゆう を に 出 (J 11 男さ。 俺 で 書 が荒神気 そこ 泥 万 か 飛 千 べ 11 ら言 次 を た 0 両 そ ん 郎 で 泥 紙 お あ で 7 稲ね 箒き け お に P は が を る 訳 た 真ね な 鎌 付 由 ح 0 か が 物の 5 を か 松 に 立 方 辰 次 柄 て 何 0

この 日論見は、 間 もなく 実行さ れ まし た。

(編注)

ます。 底本の 作品中には、 なる古典的な文学作品でもあり、 が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異 ままとしました。 身体 の障害や人権に ご理解、 ご諒承のほどをお願 かかわる、 著者が故人でもありますので、 差別的な語句や表現 い申し上げ

挿絵―萩 柚月

初出 「文藝讀物」 昭和十九年一月号 文藝春秋社

底本 「錢形平次捕物全集」 第八巻 河出書房 昭和三十一年八

月十五日初版

編集・発行 銭形倶楽部